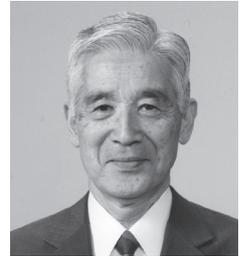


法人化に寄せて — 日本社会福祉学会に期待すること

名誉会員（第18期会長） 阿部 志郎
（神奈川県立保健福祉大学名誉学長）



任意団体であった学会が法人化され、公的性格をもつ団体として存在が保障されたことは喜ばしい。しかし、組織としてアソシエーションのもつ自由が制約されることも念頭に置かなければいけないだろう。

1995年から3年間、私は会長を務めた。任期中に、会員が3,000名に達し—安心した記憶があるが、今や5,300名を擁する大世帯になり、運営上、法人化に迫られたと察している。量的のみならず、多岐にわたる研究内容の質的充実には目を見張らせるものがある。

歴代会長はすべて学者なのに、現業出身の私が会長に選ばれた意味を考え、二つのプログラムを強調した。一つは、学会初期に、政策、制度を批判し、抗議の声を挙げたことが一再ならずあった。歴史的にその是非は別として、政策担当者との対話の場を設定し、関係者を入会に誘導すること。その意図はある程度実現し、政策への関心を深め、中央・地方の行政マンの入会者も増えはしたものの、その後、長続きはしなかったようだ。もう一つは、理論と実践、研究者と現業のワーカーの会おう場にしたかったこと。これは、学会の初めからの目標であるが、果して、その距離は縮まったのか。

かつて、高木兼寛（慈恵医大を設立し、看護教育の創始者）が、「病気を診ずして、病人を診よ」と唱え、医学者の批判を浴びたといわれるが、社会福祉の思想と、この言葉は重なってくる。研究者が「病気」という社会的病理に目を向けるのは当然だが、直接「病人」にかかわって苦悩している現業からみるといささかの違和感を抱くのは否定できない。嶋田啓一郎は、「思索して行動しない人と、実践して思索を怠る人は、その営みを空虚にする」と言った。「思索の人として行動し、行動の人として思索せよ」（ベルグソン）にも通じるが、研究者、実践者の生きる姿勢の問題にとどまらず学会の基本的性格として心に留めておきたい。

最近、気になるのは、研究報告が実証に傾いていることと、自分の世界にこもり小さく縮こまってヴィジョンと夢に欠けることだ。私自身現業に長く従事し、情熱の浅さと理論の弱さを痛感してきた。学会組織化前、社会事業研究発表大会での糸賀一雄の講演を聴き、ロゴス・パトスとエトスが一体化した人物との強い印象を受けたことがあるが、学会はこの三つを包みこむ基盤を築いてほしい。

時代は激しく動いている。福祉も例外ではない。なのに、保健、医療、福祉をめぐるシステム転換が遅々として進まないのは、包攝するパラダイムがないので基本計画も樹てられないからに違いない。このような状況で、現業が互いに連携し自ら実施計画をつくり基本計画に育てていく現場主義に価値があると、私は主張している。靴に足を合わせることで合理性と公平性を確保する制度のゆえに、利用者は不便を強いられている。「原則は破られることによって命を保つ」（プレヒト）に耳を傾けてよいのではないか。利用者主体のニーズ解決を理論構築し、政策へと導く運動体の維持が望まれるのに、現業も研究者もダイナミックな運動性を見失っていないか。学会にソーシャルアクションをと訴えるのではない。大きな広い全体的視野から専門領域を位置づけ、深い洞察を加え、実践を生み支えるエネルギーをつき動かし、現業に橋渡しする機能が欲しいのである。現業からの問題提起が脆弱化しているのも、疑いを入れない。協働の難しさを克服するのも学会の課題なのではあるまいか。

研究がますます分化、専門化していくのは避けられない。私の貧しい学識では、個々の秀れた研究の相互関連性を把握できずに悩んでいる。自動車の製造に要する3万点の部品は、数カ国に及ぶ下請工場から送られるが、完成品として車が生み出されるのは設計図に基く生産管理があるからだろう。これを compatibility とよぶ。バラバラの部品を、不具合のないように組み立てるデザインと計画に結びつけている。

福祉を統括するグラウンドデザインが今日ほど求められている時はない。学会が、将来を展望して、個々の研究を組み合わせる構想力を養って頂きたいと願わずにはいられない。

社会福祉の基本理念は、「人間を真実に人間たらしめる」（principium humanitas）にあると確信しているが、それには、研究者、実践者を問わず、生きる喜びと明日への希望を隣人に伝える者でありたいと思う。



第57回 日本社会福祉学会全国大会報告

第57回全国大会事務局 中村 律子 (法政大学)

日本社会福祉学会第57回大会が、2009年10月10日・11日の両日、法政大学多摩キャンパスを会場として開催されました。新型インフルエンザの流行、台風の襲来と、大会前日まで開催が危ぶまれましたが、両日はさわやかな秋空に恵まれ、全国の学会員の皆様をお招きして全国大会が無事終了できましたこと、会員のみなさま、関係各位のみなさまに御礼申し上げます。

大会は、『社会福祉における「公共」性を問う』というテーマでした。社会保障や社会福祉など、社会システムから排除された、もしくは内部に取り込まれて隠蔽されたマイノリティグループの声を代弁し、社会システムへの異議申し立てと変革を当事者ととも展開している非営利組織の活動(=「対抗的公共圏」)に着目し、社会福祉学はそのような領域も視野に入れて検討することが必要との観点から、あらためて「公共」性を問うことにしました。

大会特別講演は、北海道大学大学院法学研究科教授の宮本太郎先生に『生活保障の再構築－排除しない社会へー』というテーマで、比較福祉国家論の視点から日本型生活保障の検証と再構築の課題である雇用の創出について提起していただきました。また、大会企画シンポジウムでは『「対抗的公共圏」の諸相から社会福祉を問い直す』、学会企画シンポジウムでは『グローバル化のなかの社会福祉－貧困・格差・排除を超えて－』をテーマに、「公共」性をめぐる社会福祉学の新たな地平をめぐって議論していただきました。日韓学術交流シンポジウムでも『ソーシャルワーカー養成の方向－専門性を高め、職域拡大や待遇向上に向けて－』をテーマにして、日韓の研究者・政策担当者などの参加により活発な議論が展開されました。

大会参加者数は1294名、研究発表数は、自由研究発表は318演題(10日131、11日187)、今大会からの新たな企画である特定課題セッションⅠは4演題、特定課題セッションⅢは3演題、11日のポスターセッションでは43の発表があり合計368演題でした。各会場にて各専門分野での研究成果の発表をもとに研究討議が実施されました。

また、本大会から大会運営などで新たな方法も取り入れました。第1は、司会者を1名とし、司会の位置づけや役割を大きくしたこと。これまで各分科会は2名の司会者で進めてきましたが、司会者には一人で6演題の司会をお願いすることになり、たいへんな重責を担っていただきました。

司会終了後には、今後の研究発表や分科会のあり方を検討するための「自由研究発表分科会について」という報告書にも多くの感想やご意見をご記入いただきました。ご意見のなかには、発表・質疑応答時間、研究発表内容の質的問題、分科会の運営のあり方に関する有益なご意見を多くいただくことができましたので、すべてを整理し、学会研究担当理事ならびに次回開催校の日本福祉大学に報告いたしました。今後の研究および研究発表の質的向上と分科会のスムーズな進行に役立てていただきたいと考えています。第2は、特定課題セッションという新しい企画が実施されたことです。残念ながら本大会では3テーマのうち2テーマの特定課題セッションの実施となりましたが、コーディネータの先生には、発表締切り直後に発表者の採否決定、その後は大会に向けて事前打ち合わせなどの準備をしていただき、活発な討議が行われました。第58回大会からは、コーディネータならびにテーマが公募されることになり、今後の特定課題セッションでの発表・討議が期待されます。第3は、大会特別講演、各シンポジウムでは手話通訳と要約筆記を行い、自由研究発表会場でも手話通訳や要約筆記をご希望の参加者には、手話通訳や学生によるノートテークなどで個別対応をいたしました。第4は、大会プログラムおよび大会報告要旨集についても、事前参加登録した会員には、IDとパスワードを入力していただくことで大会ホームページでの閲覧もできるようにしました。

このような新たな試みも含めて、よりよい大会運営を心がけ実行委員会あげて取り組みましたが、「大会報告要旨集(CD-ROM)」は改訂版の作成を余儀なくされ、大会当日になっての配布となりました。幸い大会当日は会員各位のご協力もあり混乱もなく対処できましたが、研究発表者ならびに会員のみなさまにはご迷惑とご心配をおかけしたことを深謝いたします。

このたび、第57回全国大会を引き受けしたことで、私たち実行委員はそれぞれ貴重な経験をさせていただきました。謹んで御礼を申し上げます。開催校の任は解かれますが、今後は、会員のみなさまの更なる研究の発展と日本社会福祉学会全国大会が質の高い研究発表・討議の場となることを願い、次期開催校である日本福祉大学にバトンを渡したいと考えております。ほんとうにありがとうございました。